

時の空を見る空の友

夢見 双月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、少年は彼女を見つけた。

いつも、彼女は少年を見ることは出来なかった。

だからこそ、会ってみたいと願った。

そんな一夜から始まる、二人のおはなし。

アイドルに救われた少年と。

そらともを知った彼女の。

ほんの少し暖かいおはなし。

V t u b e r 第二弾。案の定、「消せやバカ！」と怒られたら消しちゃうぞ！作者のメンタルは豆腐だからね！

目次

いつときの空	1
あのとぎの空白	17
ときのそらとソラのとも	32

いっときの空

この話は、ただの偶然というか。
奇跡のようなもので。

でも決して。

鮮やかな冒険の旅ではなく。

英雄になる物語でもなく。

ただ、救われた事を感謝する。

俺にとっては、それだけの話なんだ。

『時の空を見る空の友』

突然だが、ちょっとした自己紹介をしよう思う。

名前……の前に。俺は『ときのそら』と呼ばれるバーチャル YouTuber のフア

ンのようなものだという事を念頭に置いて欲しい。

その上で、俺の名前は空野 朋樹という。

名字はそんなに見ないかもしれないが、朋樹という名は——漢字こそ違う人は多いけど——割という名前ではあるだろう。

……。

さらに言うと、ときのそらのファンは総じて、『そらとも』と呼ばれていて、だな。

……。

つまり、だ。そのー、……。

これはちよつとした運命なのではないか、なんて。こんな些細な事で喜ぶような高校生だとも思ってくれ。

高校生二年。バスケ部所属。

まともに試合にも出られないタイプの補欠で、スポーツにおいての青春のようなイベント物は、見るだけで終わるような第三者になる。

学力は中の中。赤点は取らないが、誰かに教えられるほど頭が良くもない。

趣味。Youtuberの生放送や動画を見ること。

と言っても、たった一人しか見ていない。いわゆる、にわかと呼ばれてしまう程度のものだろう。古参勢と比べるまでもない。

一年の後輩に技術的に追い抜かれ、先輩としてのプライドは既がない。

俺の友達の友達が、前のテストで学年一位を取ったと聞いた。

SNSで彼女をフォローする人は、俺よりもすごいセンスで推しを応援しているだろう。

正に平凡。他人と比較しては、隣の芝生の青さに辟易する。

それでも。

楽しい事さえあれば。

生きていけるもんだ。

「よう空野。一緒に食おうぜ」

「どうした。また秀才の友達自慢か？飽きねえなお前も」

「やめろや。あれは流石に悪かったって」

「だな。何度もミスター平均点に話すことじゃねえもんな」

「根に持ってるのか？」

「そんなわけねえだろ。早く座れ」

いつもの昼休み。今日も俺は友人と共に飯を食う。

コイツとは腐れ縁だが、これが日課になってしまった以上、自然とやめる気にはならない。そうする方がバカらしく思えるしな。

「ところでよ、空野。お前、変なグループの代表なんだろう？怪しい集団じゃねえのかって、お前の妹がソワソワしてたぞ」

「ちげーよ。怪しいグループじゃない」

「お前を見てたらそう思うに決まってるだろ。ちよつと前に追い詰められたような顔してると思ったら、その次の日には妙に晴れやかになってやがるしよ。犯罪にでも手を染めてるんじゃないかって噂が流れてるぞ」

「だーかーらあ！言つたら!?俺が代表になったのはアイドルみたいなものの応援団だ！そういう意味での好きな人を見つけただけなんだよ！グループのメンバーは全員が同じ趣味で集まった仲間だ！」

「まあ、実際には推しを見つけたただだから、深刻に考えてる先生達から見れば拍子抜け
だわな。……チキンだからお前に犯罪とかは出来ねーだろーし」

「おい、どこ見て言ってるんだ。訂正しろ」

「お、お前は……！犯罪者なのか……？」

「そつちじゃねえわバカ」

それから他愛ない雑談をしばらくして。チャイムが昼の終わりを告げた。

自分の机に戻る友人がふと振り返り、「あ、そうだ。今日遊ばね？」と言った。

俺は、今日は用事あるからムリだ、と突き放した。

高校のいつも通り……いや、いつもよりつまらない授業を終えて帰路に着く。今日の
部活は顧問の出張で休みになっているため、家に帰るだけだ。

用事なんてない。嘘だ。一人になりたいだけだ。

少し疲れてるからリフレッシュしたい。

……そういえば、近くのゲーセン入ったことはなかったな。

今日ぐらいは寄り道してもいいだろう。

なんて思いながら進路を変更する。

ゲームセンターに寄って散財して崩れ落ちた後、速やかに帰宅した。

泣いてなんかいいえよ。ばーか。

「UFOキャッチャーって、あんな難しかったか？昔はもう少し上手くやれたと思ったんだけどなあ……」

ベッドに転がり、うなだれながら枕に顔をうずめる。

うへえ、と呻き声をあげると隣の部屋の妹に「うっさい！」と怒鳴られた。

「得られたのがクマのぬいぐるみだけとはなあ。可愛すぎて、俺には似合わねー……」
絵に描いたようなやや大きめのクマの人形だ。店頭の目につく場所に景品として置いてあったので、いくらか消費して偶然にも手に入れたものだ。

そのあとに調子に乗った結果が今の倦怠感の原因なのだが。

「……」こうして見ると……あれだな。そらちゃんのおん肝に見えてきたな」

おん肝。ときのそらの隣に居たり居なかったり、ついでに埋まったりするマスコッ

トキャラクターだ。

人知れず動画を出してたりもしている。ホラーとかは苦手っぽい。

……そういや、なんで動けてるんだあのクマは？

バーチャルだからか？バーチャルってつければなんでも通りそうだな。

「どうせなら改造するか……まあ、名札貼っつけるだけだが」

そうと決まれば早速、紙切れを取り出す。上等な紙でもない普通のものだが、問題ない。

そして、『あん肝』と書いた名札をつけようとして手が止まる。

「あれ……どうやってくつつけてんだ？」

調べるためにスマホからネットに入り、『あん肝』を検索する。あん肝が出てきた。

わー、美味しそう。……いや違う、そうじゃない。

検索ワードに『ときのそら』を追加して再検索すると、ようやく出てきた。

穴が空きそうなくらい、あん肝（の名札がくつついているところ）を見続ける。時々、画面のあん肝と目と目が合う。

……やめろ、こつちを見るな（ブーメラン）。

……しかし、よく分からん。どうしような。代わりのもので今日は代用しよう。
安全ピン？……これは痛そうだな。

のり、か？……流石にべちやべちやしたもののはダメだろう。

セロハンテープ？……物議を醸しそうだが、とりあえずコレにしよう。

クマのぬいぐるみの左胸にぺたりと付ける。

おつ、大分いいな。もうこの景品の名前は『あん肝』でいいんじゃないかな。名札付けて。そうすればそれとものみんなはゲーセンにダツシユするぞ。

実際には、ややこしいことがあるからめんどくさそうだが。

「ともー！（ご飯よおー！）」

「あーい！今行きまーすー！」

しばらく眺めていた後、母親からの夕飯のラブコールに応え自分の部屋を後にした。

「んっ……んあ………」

目が醒める。

寒い。ここはどこだ。布団はどこだ。二度寝するから、返してくれ。薄眼で辺りをもぞもぞと手を動かす。しかし、布団は見つからない。仕方なく、上半身を持ち上げる。

そこには、雄大な大地が広がっていた。

……。

……。

「はっ。」

妙に甲高い声が広い空間に響いて消えた。

俺は物分かりのいい主人公じゃない。しばらく固まって混乱していたとしても、それを咎める人はいないだろう。

夜の空には雲ひとつなく、吸い込まれて誰もいない世界に連れてかれそうに思える。状況をまとめよう。

夕飯後、俺は親に言われるままに風呂を洗い、湯が張るまでテレビを見てだらけて、風呂に入った後そのまま寝たはずだ。

そう、寝たのだ。

あつ……（一転攻勢）。コレ夢だ。

夢だと分かれば怖くはない。ホラゲーみたいな「死んだら現実でも死んじゃうよ★」みたいなシステムでなければな。

今のところ安全だと判断した俺は、周りを探索する事にした。

歩く。

歩く。

特に何も考えずに歩く。

全然何も見つからねえ……。

夜にもかかわらず、周りはある程度は見える。

しかし、歩いてても歩いてもあるのは背の低い草が生えた丘が続いているだけだった。

時々、木が一本生えているぐらいだ。

空間がループしてるなんて奇妙な事になっていのかと思ひ、印をつける意味で表面を軽く蹴つて禿げさせたが、次に見た木には同じ印はなかった。

手がかりは依然無し。

歩くにも体力はある。足がちよつとずつ棒のように動かなくなっていく。

流石に、どこかで休もうか。

もう少しだけ。

あの木まで着いたら、休もう。

もう少し歩こう。まだ行ける。

後から考えると、まるで引き寄せられたかのように自然と動いていたと思う。

そして、見慣れないが先ほどまで見ていた。小さな生き物のようなものが視界に入る。

ちよこちよこ、と動いて。きよろきよろ、と見回しているそれは。

あん肝……!?

驚きと喜びが入り混じり、夢中で駆け出す。

まだ遠い。

構うもんか。

全力で走る。

近づくにつれ、向こうも気付いた。

気配に驚いて一瞬逃げ出すそぶりを見せ、こちらを見て更に驚いた。

「あ……!?!はあ……はあ……」

あん肝だ! そう叫ぼうとして、肺から声が出ない。完全に息が上がっていた。

おかしい。これでも運動部員現役だぞ。これだけの走りで疲れが酷い。最近はずボってないと自分で思っていたんだが……!

あん肝は俺と後ろを繰り返し向いて、困惑していた。

なんだ……？まるで何かと見比べているような……？

違和感を感じながら、ある事に気付く。

あん肝が走り出したのはそれと同時だった。

おい……!?待て!

追いかけるように駆け出す。

気付いた事。それは名札だ。

もし、だが。俺の夢なら、俺がした事つて夢にも反映されると思う。干渉のような感じ。

例えば、あん肝の名札をどうやって付けた、とか。

ペラペラでヒラヒラだった俺特製の名札が、ピタリとくっついてテープの跡も無いなんておかしい。

なら、あのあん肝は誰の夢から生まれたものか。この疑問が出た時点である確信が生まれる。

——ここに、誰かがいるんだ!!

逸れないように、必死で追いかける。何度も躓いてしまいが、何度も立て直す。もしかしたら、いないかもしれない。さっきの俺は間違いだったのかも知れない。それでも、不思議とそんな気にはならなかった。きつと、いる。そう思った。

あん肝が止まったのを見て俺も走るのをやめ、ゆっくりと近づく。

いた。

確かに木にもたれて、体操座りで佇むんでいた。

後ろ姿しか見えないが、女性のようだ。

あん肝が女性の隣まで走っていく。それに気付いた女性はあん肝に声をかける。

「あん肝? 周りを見に行ってくれたの? ありがとう〜!」

撫でられて嬉しそうにしながら、俺の方に指を指そうとするあん肝。

この時、俺は動けなかった。

この人は、誰だ。

でも確かに知っている。

この声は。

確かに、面影は残っていた。後に俺はそう語ろう。

だが事前の情報も無しに、この人に会うなんて。

「ん？誰かいたの？……え？」

彼女が振り向く。

俺が目を見開く。

そこにいたのは。

ときのそら。その新モデルに身を纏った、おそらく本人だった。

驚いたのはそれだけじゃなくて。

彼女の発した言葉にも度肝を抜かれた。

「え？……私!？」

「……………はっ。」

ときのそららしくもない声が出た。

自分から。

恐る恐る自分を見回す。

下に見える印象的な空色のスカート。細いとも言える腕。そして女のいつも生放送や動画で聞く声色。

新モデルのときのそらの前に旧モデルのときのそら、に扮した俺が立っていた。

「え？」

人生で二回の素っ頓狂な声を出した。その一つ目がこれなのだが、こうなる俺はきつと悪くない。

あのとときの空白

あのは時は、生きている意味なんてないと思っていた。
何をしてても、報われなかった。

『上を目指せ』

才能なんて、とつくの昔に無いと知った。

『お前なら出来る』

積み重ねた努力は、瞬間に崩れていった。

結果はどうだ。

現実を見ることが目指すことか？

後輩に抜かされるのが俺に出来ることなのか!?

もういい、ほつといてくれ。

俺に居場所はない。

何をやっただって無駄だったんだ。

『そらともみんな――!』

だからだろうか。

彼女が目を塞ぎたいくらい眩しいのに、あの時俺は目が離せなかったんだ。

居場所なんて、最初は何処でも良かった。そう思っていた。

俺が存在しているところがあるのが、あの時の救いだっただ。

今にして思うことは。

救ってくれた手の上が。その安らぎが。

確かに俺を癒してくれていたこと。

顔も知らない人間すら掬い上げる彼女の優しさが、心に響いていた。

「どう見ても私だよね!? すごいなあ! 確か、ドツペルゲンガーって言っただよね!? あなたの名前は何!? 同じ名前なら嬉しいぞおー!」

「ちよつと!?! 近い近い近い!?! グイグイ来ないで! 落ち着いてくれ!! 説明するからさあ
!!!」

なんとかして、ときのそら（新モデルの方）を引き剥がす。

困惑している時に、さらにグイグイと接近してこられてもややこしくなるだけなんだ

よ……………！

でも、そらちゃんが急接近した時にスゴイいい匂いしたなあ。これが何人ものそらとも達のママとなったそらちゃんの包容力か……………！

……………つて、そうじゃない！

特に重要なのは、今の俺の姿だ……………！ときのそらの新旧モデルがここで……………。

……………。

……………。

(うん、尊いなツ!!画力があればこの尊さをみんなにも……………)

……………いや違うだろ!?!しっかりするんだ、俺!!

気をしっかり持て!

くつ、駄目だ。しあわせな雑念が混ざってまともに状況を説明出来ない!

そもそも、こんな人が目の前に急に現れて驚かないワケがないだろ!?!

ファンに芸能人がサプライズで現れるみたいなんだ!こんなん、どうやっても「おわくく!!えツツツツ!!(意味不明)」つてなるに決まってる!!

「えーつと……………大丈夫?」

「え、おわ、は、へ!? 大丈夫つすよお……お?」

「なんで自信がなくなつていつちやうの……?」

身体を傾けながら、ちよつと悲しげになるそらちゃん。

その表情は不安を孕んでいる。慌てて俺は気を取り直す。

「大丈夫大丈夫! 大丈夫だから!!……なんつーか、俺はさつきここに来たばつかだから、

あんまよくわかつてねえんだ! ごめん!」

「あ、そうだったんだ。でも、なんか違和感が……?」

「あ、えーとそれは多分、俺がときそのそらの姿なのにときのそらじゃないからだと思う。

ほら、喋り方とか態度とか違うだろ?」

「言われてみれば……。そうだね!」

自分の事だから混乱するかもしれないと思つたが、案外納得してくれたようで安心して息を吐く。

「しかし、そらちゃんの声で自分の言葉が出てくるからやりづらいな。周りから見たら

一人芝居をやつてゐてーだぞ」

そう、独り言を零す。それを聞いたのか、そらちゃんが聞いてきた。

「君は男の子なのかな?」

「ああ、そうだよ。ところどころ動きもぎこちないから、そこら辺は気にしないでくれる

と助かるかな」

「うん、分かった！……でもその前に！名前を覚えてくれる？」

「名前……名前かあ」

顎に手を当てて考える。自分の名を簡単に出してもいいものか。

出すのはいい。だけどその後……例えば、現実で俺が身バレしてしまったら、どうなる？

もしかするとそらちゃんは無意識に俺を友達として鼻屑するかもしれない。

それだけは困る。俺は遠くから見守っていたい。仲良くなりたくないワケではないが、かといって近付き過ぎは返って応援するのに支障が出るのは嫌だ。

無い知恵を絞り出して、名乗った名前は。

「そらとも。俺の友人は俺をそう呼んでるから、同じように呼んでもらえると助かる」
「えっ」

いつもの呼び名を伝える。

まあ、この後のそらちゃんがとるリアクションは大体分かるんだが。

「嘘だー！そらともって私を応援してくれる人達の名前じゃん！」

「本当にこれがあだ名だよ。ファンっていうのと本名から来てるちゃんとしたアダ名だから！それと……名前だけは勘弁して欲しい」

「なんでー?」

名前を教えてもらえなかったからか少しむくれるそらちゃん。

罪悪感が身体を刺した気もするが、言い訳を紡ぐ。

「あーそれはーそのー、あれだ。そらちゃんぐらいになると、名前を呼ばただけで泣けるぐらい嬉しいんだ。でも、マジに泣いちやうからそれは……それは、な。……ちよつと恥ずかしい……」

「あー……そうなんだー」

誤魔化したような言い方ではあるが、嘘ではない。正直、今すぐにでも嗚咽とともに崩れ落ちてもおかしくないぐらい嬉しいのだから。だから、俺自身も顔を赤らめるな。やめろ、余計恥ずかしいだろ。

受け答えのそらちゃんの声が若干低くなったのに気づく。

その顔を見ると、半目でニヤツと笑っている。

なーんかイタズラを考えてそんな顔だ。彼女はそんな表情を隠そうともしてないけど。

名前呼びして本当に泣かせようつと！とか考えてるのかな。

なら、意地でも尻尾は出さん。

こつちにもメンツというのがあるのだ。

「とにかく、これからどうします?ここでのんびり待つよりは歩いた方が良くと思うんだけど」

とりあえず、今後の方針だ。ときのそらという、最早憧れの人以上の存在に会えたとはいえ、この夢の根本的な解決にはなっていないから……。

……ん?夢?

……そうじゃん。夢だったわこれ。

寝てたら、ここに来たんだしな。

「そういえば、そらちゃんはこのころに来るときってどうしてました?」

「へ?確か……えーつと、Aちゃんの編集が終わってから一緒にご飯食べて、帰って寝る準備して、寝ちゃったら……ここに居たかな?」

「同じだ。俺も寝てたらここに居たんだ。だから多分、夢の世界なんだと思うんだけど……」

「じゃあ、目覚めれば良いんだね!どうしよつか!」

「あ、ああ。確か、夢の中で眠れば向こうで起きることが出来るかどうかで聞いたような……」

「分かった!やってみるっ」

「お、おい……ま、いつか」

そういうや否や、近くの木に寄り添って目を瞑り始めたそらちゃん。しばらく観察するが、変化は起きない。

むしろ、そらちゃんの眉間にシワが寄って来た。

「ダメだった！眠れないよ！」

「……そんな気はしてた」

五分ぐらいして、飛び上がったそらちゃんにそう答えた。

「行こつ。あん肝」

そういうと、あん肝はそらちゃんに後ろから抱きついた。

何処へ行くんだ、と聞いた。

「待つてもつまんないから、歩こうと思って！」

そうなんだ、と言った。

「もー！何言ってるの。君が歩こうって言い出したんじゃん！」

そうだったか。うん、そんな気がして来た。

「一緒に行こつ？」

そう言つて、俺に手を伸ばしてくれた。

のんびり座ってた俺は見上げる。彼女の笑顔が夜空に映える。いつから、夜になっていたのだろうか。

おい、待て。

違う、夜だったのは最初からだ。

分かった。そらちゃんが寝ようとした時から、そらちゃんではなく俺に異常が起きている。

(意識が薄くなつて来てる。多分だけど、そろそろ夢の世界からおさらば出来るってことか)

先ほどから、眠気が強くなってきたのを感じる。一定の間隔で意識が持っていかれそうになる。

だが、まだ帰る訳にはいかない。

俺はそらちゃんの手を取った。

歩きながら、そらちゃんが楽しそうに微笑む。

つられるように俺も笑った。

そらちゃんが話し、俺は聞く。

そうなのか、と驚くと。

「そうなの」と、のん気な声ではにかんだ。

未来のときのそらがこれからの事を楽しそうに伝え。

過去のときのそらは面白そうに反応を示した。

ただそれだけのことを限界まで話した。

いつしか、俺は彼女の一部になったような気がしたんだ。

「それで……あ」

不意に、話が途切れた。そらちゃんが立ち止まる。

目の前に何かがある。動く様子もないから、モノだろうか。

待ってて、と彼女を待機させて様子を見に行く。

「これは……」

地に落ちていたそれを手に取る。

間違いない。俺がUFOキャッチャーで取った方のあん肝擬きだ。

名前のところがテープで留めてある。

「どうしたの!?!そらともくん!?!」

そらちゃんが驚いたように叫ぶ。どうしたのだろうか。

周りを見ても何もおかしい所はない。

ふと、自分を見る。

足が透けていた。輪郭はぼやけているがまだ見える。しかし足先は既がない。

だからだろう。このクマのぬいぐるみの意味が分かった。

恐らく『ここまでだ』ということだ。

「早かったけど、時間切れみたいだ。ごめんね最後まで居られなくて」

「どういうこと!?!死んじやうの!?!」

「言ったでしょ? 夢の中だった。現実の貴女のファンの一人に戻るだけ。死んじやうん

だったらもう少し焦るよ」

「でも、まだ話したい事が……」

「会えただけで奇跡なんだ。これ以上はダメだったって事だろう」

そう言つて、そらちゃんを正面に見据える。

「それって……あん肝?」

「違う。俺が手に入れたクマのぬいぐるみだよ。あん肝に似せる為に名札を付けている

けどね」

「クマの……」

「一時、UFOキャッチャーにハマっててね。最近久しぶりにやったんだが。一個だけ、これしか取れなかったよ。いや、そんなことはどうでもいい」

「……」

「そらちゃん」

「何？」

「今まで言いたかった事を、最後だから一つだけ。『ありがとう』。貴女がいたから、俺はいる。貴女の見えない所で、俺は確かに助けられた。貴女に救われたんだ。……言葉に表せない程、感謝してる。それだけは伝えたかった」

「そらともくん」

「……ああ、やつと言えた。そういや、星とか見えてるな。月がきれいだ」

「最後じゃないよ！」

「え？」

「これからも会おうよ！そらともくんがいるだけで、私、とても楽しかったから！最後なんて言っちゃダメだよ！」

「……うん、そうだね。……でもごめんね」

下半身はとうに消えた。胴体も透け始め、ぬいぐるみも消えていった。俺の周りを光が包んでいく。

俺はもう満足だ。このまま消えよう。

もう会う事はない。また、モニター越しの生活に戻るだけだ。

それで、十分だった。

そう思っていた。

あと、数秒。早く消えれば。

「昔、小さいクマのぬいぐるみを二つ取って、女の子に渡した事がありますか？」

目を見開いた。

どうして。

どうして貴女がそれを知っている。

口に出した本人すら驚いていた。

彼女が走って向かってくる。

「もしかして、あの時の——」

「そらちゃん！」

「うおあ!？」

「どうしたの？そらちゃん♪寝坊助さんかなー？」

「テメエ……まあ、助かったよ起こしてくれて。だが、その名前はやめてくれ。家族から名字のアダ名を呼ばれるのはおかしいだろうが」

「だってさあ、いつ聞いても笑えるもん。年上の女の人に女の子だって思われた事」

「うるせえよ……ん？」

「……?どうしたのお兄ちゃん」

「いや、」

「いい夢を見てたのを思い出しただけだ」

ときのそらとソラのもと

私となって現れた男の人、というか。

もう一人のソラちゃんの事は覚えてる。

私が活動を始めたばかりの頃だった、かな。

私よりも少し小さな中学生に会ったんだ。

「もし、見てくれるみんなに呼ばれるとしたら何にする!？」

「何って…名前？」

「うん！」

「テキストでいいんだけど…友人Aとか？」

「じゃあ、えーちゃんだね！」

「うーん。まあ、出る時なんて本当にないと思うよ。私は基本裏方だから」

「分からないよおー…! 『はっ!』としたら、ホラーゲームやってたりして!」

「うわあ、やだなあそれ! やめてほしいけど…!」

「面白そう…!」

「あ、嫌な予感しかしなわコレ」

「あっ」

「どうしたの？そら」

「えっと、こんな所にゲームセンターなんてあったっけ？」

「前からあったよ。……ほら、あそこの階段の下に広がってる段差とか、いかにもそらが躓きそうな感じで印象的じゃん」

「……………人違いだと思ふなあ」

「本当にやってたかあ……否定が欲しかったなー」

「せつかくだし、ちよつと寄り道しようっ！」

「え、ちよつと、そら!？」

「わっ!?!ぶぎゃー!」

「…………だから注意して、って言おうとしたのに。大丈夫？」

「う…………うん…………」

ちよつと転んだけど、服に付いた砂とかを払って店内に入る。

そんなことより、可愛いものを見つけたから。

「これは…………」

「見て見てえーちゃん！小さいけど、可愛いクマだよお！欲しいなあ…………！」

「いや、今えーちゃんって言うのはやめてよ。でも、確かに可愛いね」

「早速やってみよう！」

「頑張れ、そら！」

早速、百円を投入してUFOキャッチャーを動かす。しかし、頼りに見える二つの爪は熊のぬいぐるみとは噛み合わず、少し右に移動しただけに終わる。

「ううー……取れないよ」

「こういうのってなかなか取れないよね……」

「もう一回だけやろお……！」

「待ってそら！それは最後には千円単位で無くなっていく人の考えだよ！」

「で、でも……欲しい……」

「……分かったから、そんな悲しそうな顔しないで。後三百円までね」

「お母さん……！」

「誰が母さんか。……でも、UFOキャッチャーって簡単な「とりやー」ものじゃないから、慎重に慎重にボタン操作を「うりやー！」やった方がいいと思うよ、そら。例えばどの位置止めればいいのかとかなら、後ろの背景の色を目印に「んにゃー!!」するとか。後は掴むというより引っ掛けた方が「えーちゃん駄目だったー」……って早くない!? まだ1分もかかってないよ!？」

「難しいね……いーコレっ」

「落ち着いてやればよかったのに」

結局取れずにうなだれ、えーちゃんと帰ろうとした時だった。

すれ違った小柄な人がUFOキャッチャーに近づいた。

気付いたら、私はその子を見つけていたんだ。

えーちゃんも気付いたようで、その子の腕前を興味本位で見てた。

小さな子は百円を投入した。

横に進むボタンを迷いなく操作した後、その子はこちらに振り向いて驚いていた。視線を感じて気になってたっぽい。見られる事に慣れてなかったのか、その後は少し緊張気味になってた。

もう一つのボタンを押して、UFOが降りていく。

二つの爪によって、クマが挟まる。

すると、近くにあったもう一つのクマもつられて上がっていった。

これには私たちだけでなく、小さな子も驚いていた。

たまたま、お尻にあったタグに引っかかったようで、そのままぬいぐるみは二つとも仲良く取り口まで落ちていった。

「おお……」と唸る小さな子に、私は思わず近づいていたんだ。

「君、すごいね！びっくりしちやった！あんな取り方があるんだねえ」
「え!?へ、え、はい!？」

その子も急に話しかけられたからか、すごくタジタジしていたっけ。

「君、名前は？」

「えっと……そら……の……」

「分かった。じゃあ『そらちゃん』だね！私も一緒の名前なの！」

「え、違つ……つて、そうなんですか……！それは、えっと、よかったです」

「そら。あまりグイグイ行かないの」

「えへへ」

そらちゃんはしばらく考え込むようにした後、クマのぬいぐるみを一つ差し出した。

「えっ?」

「欲しかったんですよね？もう一個は妹に渡そうと思ってるので無理ですけど、その……、嬉しかったです。ありがとうございます」

「あつ」

そう言つて、私に渡した後、頭を下げて外へ行つた。

それ以降、あの子は見えない。

「あの子、可愛い！」

もちろん、彼を女の子だと勘違いしてたのはあると思う。

でも。

あの時のあの子だったのなら。

『ありがとう』ぐらいは言わせて欲しいんだ。

だから、かな。

重なって見えたんだ。そらちゃんとそらともくんが。

彼は、私が無意識に出してしまったその言葉に反応した。

そして、そのまま消えた。

———また、私は『ありがとう』と言えなかった事に気付いた。

目覚めは良かったが、自分でも浮かない顔をしているのが分かる。

あの夢のような空間から消える時の、ときのそらちゃんの言葉。

はつきりとは覚えてない。確か2、3年ぐらい前の事だ。何をしたかは覚えていても、何を話したか、とか、どんな顔だったか、は流石に覚えていない。

あのゲーセンも彼女に言われるまで、以前行った事をすっかり忘れてたぐらいだ。

でも、妙な確信はあった。あの時のお姉さんはきつと、ときのそら本人だ。それは間違いない。

……。

なんて事だ。とは思わない。

世間が狭いと分かっただけだ。

彼女が月なら、俺は小さな星の一つだ。

彼女はアイドルで、俺はファン。

決して、彼女に俺だけが見られる事はない。

見てはいけないんだ。

あれが最後なんだ。会えただけでもよかったじゃないか。

不意に、下の階から妹が叫んできた。

「お兄ちゃん!!お兄ちゃん宛になんか来たけど、コレ何ッ!?けっこう重いんだけど!!」

「あ、そういえば今日来るんだったか。悪かった!すぐ行くよ!!」

部屋の扉を開けようとする。

ふと、あん肝が目に入った。

少し悩んだ後、仮留めしていた名札をぬいぐるみから取り、ゴミ箱に捨てて下に降りた。

「えーちゃん、ゲームセンターに行こう」

「急にどうしたの?そら」

昼ご飯を食べている時に、えーちゃんに話を切り出した。

「実は、ちよつと夢を見たの。クマのぬいぐるみをくれた女の子の夢」

「あー、あの子か!?確かあん肝の……」

「夢で会ったら男の子だって言ってたよ！」

「えっ、ホントに!?! いや、でも結構中性的な顔立ち……だったような……? ん? 夢?！」

「出来ればその子に会いたいな。あの時のお礼、まだ言えてないから！」

「……んー、私は今日に行けない。ちよつと、編集作業が遅れててね。取り戻さないと行けない。でも、代わりと言ってはなんだけど、そらの時間はその分あるよ」

「えーちゃん……!」

「早めに帰って来てね。人探しはいいけど、迷惑かけないように」

「お母さん……!」

「だから違うって」

「じゃあ、行ってきまーす!」

「待ってそら! せめてサイフとケータイは持って行ってエエエエツ!!」

「あ、忘れてた」

昼から、休憩を挟みながら彼を探す。

彼はもしかすると外出してはいないかも知れない。今日が休日だからと言って出掛けるかどうかは分からない。

それでも探す。これはもはや意地の問題になりつつあるかも。

駅前やゲームセンター、近くのショッピングモールでも探してみる。

見つからない。

見つからない。

見つからない。

気がつけば、随分と長い時間歩いて回ったと思う。

既に日は傾き、夕陽が地平線へと降りて行っている。

そろそろ、帰らないと。でも。

意気消沈しながらも、淡い期待を胸に最後にあのゲームセンターに再び訪れる。

彼は、いなかった。

ゲームセンターのベンチで自販機のジュースを飲みながら、がつくり肩を落とす。

出来れば、早く会いたい。

お礼を言いたい。

たったそれだけなのに。

かつてクマのぬいぐるみがあつたUFOキャッチャーに目をやる。

確か、あの辺りでそらともくんに……あれ？

私は、つい驚いた。

同じ場所に、今もクマのぬいぐるみがあつたから。デザインは私が持っている小さなクマとほぼ一緒だ。でも、かなり大きいサイズになっている。

その前で唸りながらも何回目かのお金を投入した少女がいる。

しかし、すぐに取りこぼしてしまった。

「ああ、もう！全ツ然取れないじゃん！お兄ちゃんは本当にこれ取れたの!？」

「ちよつと貸して貰っていいかな？」

「え？」

気づいたら、声を掛けていた私がいた。

百円を入れ、任せて、と言いつ切る。

自分でも、どうしてこう言ったのかはわからない。

横に行くボタンを押して、離す。

ピツタリなところに行けたと思う。

後ろの少女が私を注視してきてちよつと落ち着かない。

そらともくんもこんな気持ちだったのかな。

次に縦に行くボタンを押して、離そうとした。

緊張からか、手が離れない。焦って手を離すが遅く、ぬいぐるみの頭から少し超えた

ところで止まった。

あ、と声自分から漏れた。

無情にも下に降りて行くUFO。

後ろからも、「ああっ」という声が聞こえる。

(ダメだった……?)

そう悲観に暮れていた。

その時、奇跡が起きた。クマが持ち上がったんだ。

「えっ」

後ろの少女と声が揃う。

なんで、と見ればそこには。偶然タグに引つかかったクマがひっくり返って吊られていた。

まるで、あの子が見せたあの時のように。

景品の拾い口に落ちるクマ。手を出して取り出す。

「はい、どうぞ」

それをそのまま女の子に渡した。

「え、良いんですか!？」

「いいよー。それにこっちこそごめんね?急に割り込んじやつて」

「大丈夫ですよ!あ、そうだお名前なんて言うんですか?」

「え？私ほそら。よろしくね！」

「私は空野 朱里つていいいます！ありがとうございます！このご恩は忘れませんそらさんー！」

「そら……の？」

「はい！……結構、珍しいめな苗字……ですよねえ私。あはは」

「アカリちゃん。もしかして、お兄さんとかいる？」

「え？……いますけど」

『妹に渡そうと思ってるので……』

「その人、『そらとも』って呼ばれてる人かな!？」

「はい、お兄ちゃんは空野 朋樹だから『そらとも』つてあだ名に……」

『そら……の……』

『そらとも』

『本当にこれがあだ名だよ。……』

「今、何処にいるか分かるかな!？」

「へえ!?!なんでですか!?!」

興奮気味になった自分を抑えつつ、それともくんとの間を説明する。すると、「あの時の……」とアカリちゃんが漏らしたのが聞こえた。聞くと、それともくんがぬいぐるみを渡した話はアカリちゃんも知っていたようで、すぐに納得してくれた。

「まさか、お兄ちゃんがやった事が私に帰ってくるとは……。お兄ちゃんの場合ですかね？ 今、近くの川の堤防で『試したい事がある』って言ってなんかやってます。まだやってると思うんで、今から行けば間に合うと思いますよ！」

クマのぬいぐるみを抱きしめて嬉しそうにする妹さんを尻目に、私はトモキくんの方へ走っていった。

重い荷物には、二種類の荷物がある。

それを試すために川の堤防に来た。

ここなら、スポーツ応援の練習だと誤解してくれるだろう。まさかライブ関連のものとは誰も思うまい。

あと、他の場所では迷惑極まりないしな。

そう言つて、荷物に入っていたいくつかの棒を繋ぎ合わせ、大きな布と合わせる。

一つ目は、この応援用の横約3メートルと縦約2メートルの大型フラッグ。通称『ときのそら応援旗』である。でかい。

二つ目は、水色基調のデザインをした羽織、『そらとも応援団専用制服』の人数分であった。生地もしっかりしている。

旗を地面に置き、デザインを吟味する。

「オーダー通りだ。ありがたい」

彼はつい最近行われたV t u b e rの同人誌即売会にて、ほかのそらとも達と意気投合し、『そらとも応援団』なるものを設立。その応援団長となっている。

故に、団長としてその活動を本格的なものにしようとしていた。

それが今日に至るまでの経緯である。

今回は手芸が得意な友人に依頼して作ってもらった物品の試着及び、応援旗を試しに振ってみよう。と言うのが目的である。

手芸が得意な友人とは、学校でつるんでいたあの男である。何故あいつは手芸が得意という女子力が高いことになっているのかが少し気になってはいるが、この時ばかりはありがたかった。

衣装の方も試着してみると手紙がポトリと落ちた。

奥には、頼んだ覚えのない服も入っている。

彼が手紙を読むと、

『やあ、ちゃんと仕事しといてやったぜい。

いい小遣い稼ぎにはなったが二度とやんねえ。普通に辛かった。

あと、参考までにときのそらの動画だの生放送だの見てたら俺もハマってしまった。どうしてくれる。

悔しいから、応援団長の衣装だけはときのそらの男装バージョンみたいなコンセプトで作ってやった。感謝しろ。

P.S. おれはえーちゃん派だ。

友人Bより』

と、書いてあった。

てか、せっかく堤防に来たのに、おれのだけ羽織じゃないんかい。

着替える場所を想定していなかったそらともは少し考え、今日だけは羽織を借りて試着しようと思協した。

陽が落ち、辺りが暗くなってきた。

羽織制服の方は問題ない。後ろには、『そらとも』と激しく主張されていたり、星マークがワンポイントで胸に付いている。内側のTシャツが白ならば、より『そらとも』として映えるだろうと思うのがこれの感想だ。

次にときのそら応援旗をそれらしく振り回す。というか振り回すためだけに外に出てきた。

これはイベント用だが、使えば盛り上がる事間違いないだろう。我ながらいい事を思いついたものだ。他の応援団をも驚かせる勢いだろう。

しかし、思ったより風が強くて引つ張られ、何より単純に振るだけで重い。そんなに長い間は振り回せないかもしれない。

絵柄としては裏表で映えるように、文字のない『ときのそらイラスト』にしている。顔と手だけが描かれたデフォルメ絵だ。

なんだこれ。旗持つてる俺、普通にカッコいいわ。というか、そらちゃん可愛いな、やっぱ。デフォルメしても全然いいわ。

取り敢えず、後のことは家でもやれるし、暗くもなってくる頃だ。今日は帰ろう。

そう思つて応援旗を片付け、身支度をする。

すると、人影が近づいてきた。

ランニングだろうか。いや、違う。明確におれの方に走つてきた。

その人影はおれの手前で止まり、肩を上下させている。

羽織を脱ぐのも忘れて彼女を見て顔を強張らせる。

直感的に感じる。彼女は夢のあの人だと。

夢だったものが、現実になる。

ただでさえ有り得ないと思つていたものが近くに來た衝撃は計り知れない。

彼らは三度、邂逅する。

「ときの……そらちゃん……！」

「久しぶり。そらちゃん。いえ、そらともくん！」

「……昨日ぶり、と言えはいいんすかね……？夢とはいえ、会っていたんですから」

「あつさり認めちゃうんだね」

「そりゃあ、一介のファンが近づき過ぎるのはみんなに悪いと思って、隠したかったですよ。でも、『そらちゃん』って毎回妹にいじられてるんで。流石にバレたつてのは分かりますよ」

「うん、妹さんにも話してたんだね。あの時のこと。君の事を話したらすぐに教えてくれたよ」

「あいつ……。いや、これは俺の運が悪かったのかな？」

「違うよ。運なんかじゃなくて、私が会いたかったの」

「え……。そらちゃんが……。？おれに？」

「うん」

ときのそらが、そらともに近づく。

彼は立ち止まったままであり、必然的に距離は縮まる。

彼女の鼓動が彼にまで響くのではないか。

彼の生唾を飲み込む音は彼女に聞こえるのではないか。

不意に、彼女の口から放たれた。

「あなたに、ずっとお礼を言いたかった」

「夢の中で話し相手になってくれてありがとう」

「あの時に私に感謝を伝えてくれてありがとう」

「ぬいぐるみを貰った時に言えなかった、ありがとう」

「あなただけに、伝えたかったんだ。えへへ」

ベンチに誘って彼女を座らせた彼の顔は、目に見えて安堵していた事だろう。

結局、彼が彼女を避けた理由とは、自分みたいな人間に恋をしていて、これによって本来の活動に支障が出ることにあった。

実際は、そんな事はなかった。

彼女を通じて見たものは、ただの幻想だった。

彼女は自分の気持ちを伝えたかっただけなのだから。

夢の中で俺と同じように。

喜ばしい事だ。ちよつとだけ複雑でも、喜ぶべき事だ。

それとは別に、本人からの直接の感謝には照れまくっていたが。

正直、家に帰ればベッドの上で悶絶ものである。今、平静を保っているのが既に奇跡だとそらともは思った。

しばらくして、気まずい状況に嵌ったことに気づいた二人は頭を抱えていた。

そらともは顔が赤く、何を言えばいいか分からない。

ときのそらも先程の自分を思い出し、少し照れながらも何を言えばいいか考えがまとまっていない。

要するに、何もせずにベンチに座っているだけである。

それなのに、どこか二人とも照れくさい。

流れる静けさに、お互いがドギマギとした。

「あ、あのー！」

「は、はあい!?!」

勇気を持って動いたのは、彼女だった。

それに対し、甲高い声を出しながらも応えるそらとも。

とにかく、話題を。

そう思ったのだろう。

気遣いから始まった彼女の行動は。

「えっと、月が綺麗だね！（?）」

結果的に爆弾を投下する羽目になった。

「えっ……ああ。……ファツ!」

胃が締め付けられるように痛みが再発生する。

彼は、なぜさつき過ぎ去ったはずの心労が戻ってきたのか。その疑問によって、さらに頭が混沌と化してしまう。

つまり……。

そらともは、よく考え。よく悩み。頭を抱え。
絞り出した。

「まだ………死にたくはないかな」

「ええっ?!なんでそうなるの!?!」

「えっ?」

「えっ?」

しばらくして、二人揃って吹き出した。

彼は大声で笑った。

彼女は口を手で押さえながらも笑った。

固かったものがほぐれた気がした。

「なんで、月なんて言い出したんだよ」

「ほら、夢の中でそらともくんが最後に言ってたじゃん!それが今、急に出て来たの」

「あれは……。まあ、いつか。……そらちゃん、止まるんじやねえぞ?」

「止まらねえぞー!」

「あはは、なんてな。ずっと応援してるよ」

ときのそらのポケットからバイブが鳴る。

ケータイのメッセージには『そろそろ帰ってきて！』と来ていた。

彼女はベンチから立ち上がると、彼も立ち上がった。

駅の方まで送るよ、と言ってくれたので甘えさせてもらった。

「送ってくれるなら、家の方まで来ちゃう？」

「ありがたく遠慮しておこう。あらゆる人間に刺されかねん」
「？」

「あつ。見て、そらともくん！あの時みたいな綺麗な夜空！」

「ああ、夢の……。確かに、あの時の空も綺麗だったな」

「え？ねえ！それってどっち!？」

「え？どっちって……？ああ、なるほどね。どっちだろうね」

「ああ！いじわる——！」

その後は、そらちゃん……いや、ときのそらちゃんを送って、俺も家に帰ろうと……して、荷物を忘れたのを思い出して走って取りに行った。

その日の寝る前に、いつの間に交換してたのか。妹経由で伝わった電話番号によってかかった電話にて、『月が綺麗ですね』の意味を知ったそらちゃんが「そういう意味じゃなくて!……」などの弁明をしばらく聞いた。

その時の心情は、言い表す事が出来ない程の虚無を味わった、と言えば伝わるだろうか。

ちなみに、「あの時の『死にたくない』とかなんとかって、どういう意味があつたの?」と言われたので、何でもないと返しておいた。

意味を知られたら、ヘタレとしか思われないから。

この日を境に、会うどころか、連絡も来ない。

彼女も忙しくなったのだろう。嬉しい限りだ。無茶さえしなければ俺は心から応援しよう。

二人だけのあの夢も見ない。俺が取ったクマのぬいぐるみは妹が取ったものと一緒に、妹のベッドの中だ。

今にして思えば、お互いのあん肝が繋がりがあって……なんて考えもしたが、今となつては必要ない。

そして、もう少しだけ時は過ぎて——。

今日。

「団長お……」

「どうした？緊張でもしたのか？」

「はい。解ける方法ないですかね？」

「任せろ。全員、集合だ！」

号令をかける。俺たちも随分大規模な応援団になってしまった。最初はそれっぽい馴れ合いのつもりがどうしてこうなったのか。……まあ、今は置いておこう。大きく息を吸って、思いつきり叫ぶ。

「諸君ツ!!我々は何者かツ!!」

「!ときのそらを見守る、そらとも応援団です!!」

ほかのメンバーも負けじと叫ぶ。

「いいかツ!ときのそら様のためならば命を懸けろッ!」

「!応ツ!!」

待って。「応ッ!!」の圧が強くない?

「全てはそら様を御心のままに!全てを女神に捧げるのだツ!!」

「!応ツ!!」

こうなったらヤケだ。最後までやりきろう。

「この『ときのそら応援旗』の下、全力を尽くしてエールを送るぞお!!」

「!突撃いッ!!」

「Aちゃあああんツツ!!」

周りからクスクスと声が聞こえる。見ると、並んでいる赤いメッシュの女性に至って

はお腹を抱えて笑っていた。そんなに面白かったかこんちくしよう。

まあ、迷惑に思われてなかったらいいか。笑ってくれるなら構うまい。

今日は全V t u b e r 総出演のなんでもありなライブ。

楽しまなけりや損なのだから。

白のシャツに水色のベスト、同じく水色のズボンを身に纏い、赤のネクタイに星型のネクタイピンがアクセントとなった衣装。

通称、それとも応援団長の制服。

ときのそら衣装（旧モデル）を男性用に改造したかの様な装束だ。

もしそらちゃんが見つけたら、驚くだろうか。喜ぶだろうか。

見つけたならその時はこの旗を思いっきり振ってやろう。

「ずっとここに俺はいるぞ、なんてな」

この話は、ただの偶然というか。

奇跡のようなもので。

でも決して。

鮮やかな冒険の旅ではなく。

英雄になる物語でもなく。

ただ、救われた事を感謝する。

二人にとっては、それだけの話だったんだ。

『時の空を見る空の友』

終わり。